

宣教と文明化

—— R・アンダーソンの戦略 ——

伊 藤 豊

1. 問題の所在

海外宣教において、いわゆる「福音化 (evangelization)」と「文明化 (civilization)」の両者は、宣教師の活動の表裏をなすべき相互補完的な概念であると、一般に捉えられてきた。福音化とは、つまりキリスト教の伝道あるいは宣教のことであり、また文明化の具体的な形としては、特に学校の設立や運営を含む教育事業の推進が挙げられる。この点に関連して、宣教活動史研究の大御所であるP・ビーバーは、福音化と文明化の関係を以下のように概括している。

「福音化」と「文明化」はアメリカの宣教団体の方法において、さらにはプロテスタントの宣教活動全般においても、キーワードであった。これら二つのどちらが優先されるべきかという議論はあったものの、両者は相互補完的であると通常は捉えられたのである。「福音化」を通じた啓示の受容は、「キリスト教」文明、つまりヨーロッパ文明を獲得しようとする欲求と誘引を、諸々の非ヨーロッパ民族に対して常に与えると考えられたのであり、また「文明化」がこれらの諸民族との接触の初期段階において重んじられた場合には、それによって啓示の理解と受容がもたらされると考えられた。こうした結果として、「文明化」は特に学校教育を通じて促進されるものとして、重視されるようになったのである。¹

ここでのビーバーの指摘に表れているように、福音化と文明化という二つの要素のカップリングは、プロテスタントの宣教活動の各所でいわば常態と化してきた現象であった。ただし両者は相互補完的といわれながらも、宣教と文明化のどちらをまず進めるべきかという問いに対しては、キリスト教化の前提としてまずは文明化を進めるべきというのが、宣教において長年にわたり自明とされてきた前提であった。キリスト教を拓げる立場からすれば、教化の対象となる人々は異教徒であり、福音を受け入れていないという点で、いまだ野蛮人である。こうした人々をキリスト教化するためには、まずその下地として読み書き能力を含めた彼らの知性の開拓、つまり文明化がなされなければならない。一方で宣教の対象となる人々が、西洋由来の科学や知識の点で一般に後進的であることは、彼ら自身もしばしば認めるところであり、したがってキリスト教と

もにもたらされる文明へのニーズは、受け入れ側にも強く存在したわけである。

このような理由により、海外赴任地における宣教師とは、現地住民のキリスト教化に従事することはもちろん、学校建設や出版事業などを通じて、先進的な西洋文明の普及にも合わせてつとめるべき存在とされた。1810年に創立され、19世紀のアメリカ合衆国で最大の宣教師団体となるに至ったアメリカン・ボード（The American Board of Commissioners for Foreign Missions）でも、こうした宣教師のあり方は従来から是認されてきたのだが、一方でアメリカン・ボードの内部にあってそれに異を唱えたのが、長年にわたって同団体の海外担当幹事の任にあったR・アンダーソン（Rufus ANDERSON, 1796-1880）である。宣教師は直接的な宗教活動に集中すべきであり、したがって従来から海外宣教に付随して進められてきた、学校経営や出版などの文明化の事業からは人員と資金を引き上げるべし、というのが彼の主張であり、これは後に彼のリーダーシップのもとで、アメリカン・ボード全体の方針として採用されることになる。

アンダーソンについて触れた日本語文献はそれほど多くもなく、しかも記述は概して断片的であるが、それらの中でアンダーソン論としての実質的な内容を備えた先行業績として、中山和芳「福音伝道と文明化—19世紀アメリカン・ボードの宣教思想」がある²。中山論文の直接的な目的は、そのタイトルにあるように19世紀アメリカン・ボードの宣教思想を通観することであり、そうした試みの一環として、おもに「2 ハワイにおける宣教活動」ならびに「3 ルーファス・アンダーソンの宣教思想」で、アンダーソンが論じられている。中山論文がソースとして用いているのは、前出のビーバーによるアンダーソンの選集ならびにアンダーソンを分析の対象としたいくつかの英文二次文献であり、全体としてはアンダーソンの事跡と思想に関して優れた要約を提供する業績となっているものの、一方でアンダーソンを論じているにせよ、彼の言葉そのものの引用がやや少なすぎる観もある。特に「3 ルーファス・アンダーソンの宣教思想」の章では、アンダーソンの言論を分析の直接的な対象としつつも、彼の語った内容は引用ではなく要約の形で提示されている場合がほとんどであり、またその典拠にはアンダーソン自身の原著ではなく二次資料が多く用いられているという点で、多少の不足を感じさせる。さらに後述するように、中山論文の解釈に対して、私としては異論を有する部分もある。

そこで本稿では、海外宣教に際しての宣教と文明化の分離というアンダーソンの戦略について、「彼の企図全体を示す宣言」³と目される『異教徒宣教の理論』（*The Theory of Missions to the Heathen*, 1845）ならびに他の重要と思われる著作を一次資料として考察したうえで、その同時代的な含意に関する私見を提示したい。

2. アンダーソン略伝

文明化と宣教をめぐるアンダーソンの議論を紹介する前に、そもそもアンダーソンとは何者であったかを、まず簡単に説明しておきたい。⁴

R・アンダーソンは1796年8月17日に、メイン州ノース・ヤーマスに生まれた。父はアンダー

ソンと同名の、地元で著名な牧師であった。若きアンダーソンはブラッドフォード・アカデミーからボーディン大学へと進み、1818年に同大学を卒業する。その翌年、アンダーソンはアンドーバー神学校に入学し、1822年に同校を卒業後、海外勤務候補者としてアメリカン・ボード入りを申請し、許可される。

しかしアンダーソンはこのように海外に出ることを希望していたにもかかわらず、アメリカン・ボード入りしてまもなく、補佐役として事務局業務に充てられることになった。ここでの彼の仕事ぶりは運営委員会によって評価され、結果としてアンダーソンは1823年の春、アメリカン・ボードの補助幹事に任命された。1826年5月、アンダーソンは按手礼を受ける。教会を司る者はもちろん、海外勤務に向かおうとする宣教師が按手礼を受けるのは、すでにアメリカン・ボード内では慣例化していた一方で、事務方として按手礼を受けたのは、おそらくアンダーソンが初めてであったと、前出のビーバーは推測している。⁵

1832年、前任者の相次ぐ死去にともない、アンダーソンは三名からなるアメリカン・ボードの渉外幹事の一人に選ばれ、正式に同団体の職員になる。これらの渉外幹事のうち、二名はアメリカ国内の事項を所管していた。一方でアンダーソンは、渉外幹事に就任した当初から「海外担当幹事」として遇され、後には「筆頭幹事」とみなされるようになる。幹事に就任後まもなく、アンダーソンは運営委員会にも加わるようになり、やがてその首座を占めるに至った。彼はこうした立場から、アメリカン・ボードの宣教方針や海外宣教のあるべき姿についての持論を、説法や活字を通じて精力的に主張していく。アンダーソンはアメリカン・ボードの機関紙である『ミッションナリー・ヘラルド』にしばしば寄稿し、また彼の議論はトラクトなどの形でも出版された。

アンダーソンは上記のような形で、1860年代までアメリカン・ボードのリーダーシップを握り続けた人物である。1866年、彼は幹事から引退し、以後はアメリカン・ボードの歴史を書く仕事に没頭する。アンダーソンが没したのは、1880年のことであった。

3. 海外宣教の前史としてのインディアン宣教

アメリカ合衆国のキリスト教界における、宣教つまりキリスト教化と文明化の関係を考えるにあたっては、インディアンを対象とした宣教をまず考慮することが必須となろう。歴史的に言えば、ニュー・イングランドにおいては、同地で植民地期に発生した対インディアン戦争である、いわゆるフィリップ王戦争 (King Philip's War, 1675-76, 「フィリップ王」とはワンパノアグ族の酋長メタコメットを指す白人側の呼称) が、新大陸において文明＝キリスト教勢力を代表するアメリカ人のインディアン像を、強く規定することになった。この戦争を契機として、インディアンの野蛮性は特に強調され、彼らは多分に悪魔化された存在として、アメリカ人一般の間で広範に認識されるようになった。こうした歴史や一般認識を背景として、後のアメリカン・ボードによるインディアン宣教においても、宣教の前提として、野蛮人であるインディアンの文明化がまず必要とされたわけであると、いちおう言えよう。⁶

アメリカン・ボードにとってのインディアン宣教とは、のちに本格化する同団体の海外宣教の前史とみなされるべきものであった。アメリカン・ボードは創立直後から1840年ごろまで、チェロキー族を対象とした宣教活動を展開していくのだが、こうした宣教師は後の彼らの海外宣教活動を様々に規定していくことになる。つまり、文明化と宣教を不可分のものとする認識がアメリカン・ボードにおいて特に確立されたのは、その最初の宣教活動の一つであるインディアン宣教を通じてであった。宣教師の多くは、文明化と宣教を分離した別の概念ではなく、通常は表裏一体のものと捉えていた⁷。アメリカン・ボードの創立メンバーの一人であり、また初代の渉外幹事を務めたサミュエル・ウースター (Samuel WORCESTER, 1770-1821) は、インディアン宣教の目的が文明化とキリスト教化の実現であると明確に述べたうえで、以下のような主張を展開している。

アメリカ・インディアン諸部族を文明化そしてキリスト教化していくという目標は……看過すべからざる重要なものであり、またそれ自体が興味深いものでもあり、さらにはアメリカ人キリスト教徒の良心と感性と寛容さに対して、極めて特有の課題を提起するものでもある……若者世代に対して初等教育や実学そしてキリスト教の教育を段階的に施すために、そしてインディアン全体を言語の面で英語化し、生活習慣の面で文明化し、そして宗教の面でキリスト教化するという聖なる恩恵によりつつ、宣教師の指導と監督のもとで様々な部族の中に学校を建設すること——これが現在の計画である……そしてインディアンが英語を読むことを学べば、全般的な進歩のための知識と手段の源泉も彼らに対して開かれることになり、その結果、こうした進歩のための知識と手段は、彼ら自身の言語が彼らにもたらしうるのは比較にならないほどに、膨大かつ多様なものになるであろう。言語において同化されれば、彼らは習慣や生活様式の点で、白人の隣人へとより速やかに同化されるであろうし、両者の交流は容易になり、またインディアンにとっての利点は数え切れないであろう⁸。

宣教師のリーダーシップのもとになされる文明化とは、つまり「インディアン全体を言語の面で英語化し、生活習慣の面で文明化し、そして宗教の面でキリスト教化する」ことである。この一大目的のために、インディアンの若い世代には学校教育が施されなければならず、またそうした教育を通じて、文明化の精髓たる様々な実学そしてキリスト教が伝えられたのである。教育の媒体として英語が教えられるべきというのは、宣教師の間では自明の前提であった。英語での読み書きは、インディアン自身の言葉によるものよりも習得が容易だとみなされ、また英語の習得を通じて白人の生活習慣への同化が促進されることで、白人とのコミュニケーションも容易になると理解されたからである⁹。

4. 宣教の足枷としての文明化—アンダーソンの批判 (1)

宣教理論家としてのアンダーソンは、宣教と文明化の峻別のみならず、前者の后者に対する優越を積極的に説いた。ただし彼の議論の主眼は別に文明自体への明示的な批判にあったわけではない。むしろアンダーソン自身は以下のように、自身の属する西洋文明の意義とその宣教への効用を認めていた。

我々が福音を世界へと伝えるために用いることのできる手段は、使徒たちの時代と比べて、はるかに強大なものである……手段に関して言えば、我々は弁舌の能力という点のみを除き、使徒たちに勝っている。キリスト教の体制が登場して以降、世界全体が福音の伝道者に対して、これほど開かれた時代はなかった。一方で、文明は近代科学と連関しており……またキリスト教とも完全に連関している。さらに付言すべきは、福音によって我々のニュー・イングランドにもたらされた文明は、宗教的な見地から見て至高かつ最善のものだということである¹⁰。

ニュー・イングランドこそ西洋宗教文明の精華であるというのは、当時のアメリカ人教養階級の一般的な認識であったと言えよう。さらに言えば、創立時のアメリカン・ボードはマサチューセッツ州ウィリアムズ・カレッジの出身者を中核としており、また同団体の所在地はボストンである。アンダーソン自身もニュー・イングランドで生まれ育ち、そこで教育を受けた一人であり、彼はそのような者としてニュー・イングランド文明（ひいてはアメリカそして西洋文明）を、当然のごとく全面的に肯定するわけである。

上述のような文明観ならびにアメリカ文明への自負は、別にアンダーソンに固有のものではなく、当時のアメリカン・ボードの宣教師たちに共通するものであった。だからこそ宣教師たちは海外宣教の現場において、野蛮人やその社会を文明化するための、いわばエージェントとして積極的に活動していったわけだが、宣教師のこうした傾向には一つの重大な弊害が見て取れると、アンダーソンは指摘する。

我々自身の社会そして宗教のこうした完全性こそ、異教徒の諸民族の中で純粋に精神的な宣教を実施していくことに対する、大きな妨げとなるものである……つまりキリスト教は、教育、勤勉、市民社会の自由、家政、社会の規律、優れた生活手段、そして秩序ある共同体といった、諸々の恩恵の……ほとんど普遍的な拮かりと、大昔からずっと同一視されてきたのである。それゆえに、異教からの改宗者の敬虔さをめぐって、こうした諸々の恩恵の獲得や所有といった要素が、我々の理念へと多分に含まれるようになる。そして宣教による福音伝道をめぐっても、我々の社会と同じような高度に進歩した社会を異教徒の部族や民族の中に

創造するということが、我々の理念になってしまうのである。さらに言えば、こうした膨大な知的、道徳的、そして社会的な変化のために我々が容認するのは、ほんの少しの時間的余裕にすぎない。我々はキリスト教改宗者の第一世代に対して……道徳、生活様式、政治経済、社会組織、権利、正義そして公平といった、我々にとって根本的なすべての理念を継承することを期待するものの、これらの理念の多くは、我々自身の社会がその獲得に何世代もかかったものなのである。¹¹

ここでアンダーソンは、宣教の対象となる現地人に関して宣教師が有しがちであるところの、重大な錯誤を指摘している。つまり宣教の成功が、政治経済や教育制度や価値観や道徳などを含むところの、宣教の対象となる人々の社会さらには精神の構造の急激かつ全般的な改善と、しばしば完全に同一視されてしまうということである。こうした改善によってもたらされる「恩恵の……ほとんど普遍的な拡がり」なるものは、宣教の成否の度合いを測るいわば指標として機能した。一方で、文明化のエージェントたる宣教師の側から見れば、自分たちの懸命の努力にもかかわらず未だ文明の水準に達するをえない現地人は、その事実をもって十分にキリスト教化されていないと判断されるわけである。現地人の中での宣教の成功と文明化の達成を、性急なほど短期間で、かつ両者を同時に求めようとする傾向は、宣教師個人の次元での態度のみに観察されたものではない。例えば初期のアメリカン・ボードは、宣教の対象となる地域に宣教師を送り込むのみならず、しばしば彼らに農民と技師を同伴させたのだが、これはキリスト教化と文明化が不可分であり、また同時に達成されるべきであるという、同団体の認識を反映した慣行であった¹²。アンダーソンの指摘によれば、宣教師は上記のような状況のもとで、その海外宣教活動に際して、いわば二重の使命を帯びざるをえない。

宣教には追求すべき二重の目的がある。一つはキリストの使者たるべしという、単純かつ崇高で精神的な目的であり……「人を神との和解へと導くこと」である。そしてもう一つの目的は、様々な直接的手段によって、改宗者たちが属する社会制度の構造自体を改造することである。こうして、宣教の目的は多少なりとも複雑化していくのであり、その達成のための一連の手段も複雑そして重荷となり、さらには費用もかさみかねない¹³。

「キリストの使者」としての宣教師は、かくして社会改革と文明化のエージェントを自任する存在でもある。宣教と文明化という二つの使命は、宣教師の内部で矛盾なく両立されてきたわけであるが、一方でこの引用の最後の一文に見られるように、宣教理論家としてのアンダーソンの独自性は、大方の人々に当然視されてきたこのような二つの要素の密な関係こそが、宣教それ自体の目的を曖昧化し、また宣教の達成を妨げかねないと、みなしていることにある。

だとすれば、次に課題となってくるのは、そもそも宣教とはいったい何なのか、またそれに従

事する宣教師の固有の役割とは何かを、明確化することであろう。アンダーソンによれば、宣教師の仕事は「定住した牧師 (the settled pastor)」のそれとは、おのずから異なるという¹⁴。牧師とは一言で言えば、教会の主催者である。彼はある教会に集う特定の人々の精神的な指導者として、その地に定着すべき者であり、したがって信者に対して彼の負うべき役割は、より長期的かつ包括的なものとなる。一方で宣教師の使命は、人を神との和解へと導くという点で牧師と共通する点はあるながらも、本質的には異なったものであると、アンダーソンは述べる。

宣教師が個人として成すべき大きな仕事は、未だ改宗せざる者にかかわるものである。宣教師の役目は教えを拒絶する者に対して、キリストの代理として彼らを説き、そして神と和解させることである。十字架の戦士としての宣教師の職務は、天上の主人たる神の名において征服をおこない続けていく、つまり「征服しつつ、さらに征服へと進む」ということであり、そしてこの目的のために特に育成された次世代の人々へと、自身の征服事業を安定的かつ永続的な形で伝えていくことである。征服の継続という理念は異教徒への宣教における根本であり、また宣教の精神性と効率性にとって必須のものである……宣教師は牧師のために、新たな地盤を準備するのであり、そうした地盤がいったん準備され有能な牧師が着任した時に、宣教師自身は先へと進むべきである。つまり宣教師はキリスト教文明の影響をもたらす先駆者でありながらも、一方では……キリストの使者として、福音が未だ説かれていない場所でそれを説く存在なのである。そして文学や科学や商業、さらには教会運営や政治や社会制度をめぐる諸問題について言えば、牧師ならばともかく、宣教師はこういった余計な事項には、当然ながら極力かかわるべきではない¹⁵。

宣教師とはいわば「十字架の戦士」であり、また異教徒に福音をもたらし、それによって宣教といういわば「止むことのない征服」の尖兵たるべきだと、アンダーソンは端的に述べる。この観点からすれば、牧師の主業務たる教会の運営すらも、一種の障害として忌避されるべきなのである。つまり宣教師の本質的な役目は、「キリストの使者」として海外宣教の現場にあり続けることにこそ存し、また宣教師は意識的にそうした次元にみずからを止めるべきであるというのが、アンダーソンの主張なのである。

5. 文明優先の受容—アンダーソンの批判 (2)

アンダーソンの文明化批判のもう一つの特色として、文明化とキリスト教化が相互補完的であるという従来からの観念が、実のところ必ずしも正しくないのではという問題提起がある。この問題に関して彼が具体的に論じたのは、宣教師による教育や学校事業の、宣教自体にとっての不毛性である。1854年から55年にかけて、アンダーソンはアメリカン・ボードの運営委員会によって、インドとセイロンにおける宣教事業の視察のため、同僚とともに同地へと派遣される。彼が

帰国後に連名で提出した報告書には、宣教との関連で見た教育事業の効果に対する深い懐疑の念が表明されている。

アーメドナガル（訳注：インドのボンベイ東方の都市）……およびセイロン・ミッションは学校教育の面で、両方とも似たような形で始まっている。つまり異教徒の子弟を対象とした、異教徒の教師による学校というのが、これらのミッションにおける当初の顕著な特徴であった……マラータ・ミッション（訳注：インド中西部のマハラシュトラ地域に展開したミッションの総称）における生徒の数は一時期には2,000名に達し……またセイロンの生徒数は6,000名に上った。さらには選抜学校や寄宿学校も存在した。しかしこれらの学校も、やがては衰退の時期をむかえていく……異教徒の校長は、真理の説法という点では仕事を任せられない存在であり、こうした人物を雇うために資金を費やすよりも、もっとましな使い方があろうと取沙汰されるようになった。マラータ・ミッションにおける我々の同僚の発言によれば、同ミッションでこのように教育を受けた10,000人の生徒のうち、改宗した実例を一つも指摘できなかったという。またセイロンの我々の同僚は、同ミッションの初等学校に在学した30,000名の生徒のうち、改宗したのは約30名にすぎなかったと回顧している。学校全体の成果を見れば、マラータ・ミッション宛の我々の書簡で述べたように、「学校は改宗をもたらす媒体としては、ほぼ完全に期待外れであったし、またその準備的な手段としても、こちらの望みを満たすものではなかったし、さらに補助的な機関としては、あまりに費用のかさむものであった」¹⁶。

初等教育は宣教における、極めて重要な要素であった。聖書を読み、またその教えを理解するには、識字と文章読解のための一定の知的訓練が必須であったし、だからこそ文明化の核心としての教育は、キリスト教化に絶対的に必要な要素であると、一般にみなされたわけである¹⁷。アンダーソンもまた、こうした教育自体の意義に疑念を呈していたわけではなく、実際、彼の別の著作においては、牧師による現地人改宗者に対しての学校教育の意義、さらには現地人聖職者の養成のための学校の必要性が、積極的に論じられている¹⁸。

むしろアンダーソンが上の引用で主張するのは、文明化の典型的な手段としての学校教育が、異教徒をキリスト教化するにあたって、従来期待されてきたほどの効果を現実にはもたらししていないということであった。1816年のマラータ・ミッションの設立以降、同地における継続的な宣教と学校事業にもかかわらず、多くの生徒のうちキリスト教に改宗した者は皆無であり、またセイロンでも過去の生徒のうちで、改宗するに至ったのはわずかの数にとどまる。文明化によって宣教を達成しようとする努力が不毛なのは、これらの現実が証明しており、また宣教の補助手段として学校教育をおこなうにせよ、その経済コストの高さは無視できない、というのがアンダーソンの議論であった。

アンダーソンはこうした認識に立ちつつ、従来から宣教と不可分とみなされてきた学校経営の分野を、アメリカン・ボードの事業において極力縮小しようとしていった。この点に関するアンダーソンの事績として最も有名なのは、セイロンにおいて当時すでに30年あまりの歴史を持っていたバティコッタ・セミナリーを、彼が1855年に廃校へと追い込んだことである。

バティコッタ・セミナリーは31年の歴史を有しており、この期間に費やされた資金は、同校で教師として働く宣教師たちの給与を含めて、およそ10万ドルであった。後には食費を自弁とする学生の受け入れが始まり、裕福な家庭の子弟が入学するようになった結果、好ましからざる不測の変化が同校にもたらされることになる。彼ら豊かな学生たちの入学の主な目的は猟官の準備であり、この種の学生たちの影響は、同校の宗教的な性格にとって不都合なものであった。1855年には96名の学生のうち、教会の会員たる者はわずか11名であった……教会の会員となった学生の、この時点までの総数は670名である。これは過去の学生全体の半分をやや超える程度であり、そのうち450名が1855年時点で存命であった。約90名は教会から除名されたが、彼らの大部分は異教徒の妻を持ったゆえに、そのように扱われたい。上記の時点で、卒業生のうち80名はアメリカ系宣教団体（訳注：現地のアメリカーン・ボードのこと）に雇われており、また30名は他の宣教団体に就職していた。一方で、セイロン政府ならびにインド政府に勤めていた者は、158人である。¹⁹

教育は現地人のキリスト教化のために、そしてセミナリーは現地人聖職者の養成のために必要であり、アメリカン・ボードやその宣教師の立場では、学校とはまずもって、この目的のために意義が認められるべきものであった。しかし一方で、上記の引用に顕著なように、現地人が学校に通う動機となったのが、キリスト教そのものではなく、むしろそれとともにもたらされる文明の実際的な果実、つまり官職の獲得に向けて役立つ実学であったことは、注意されてよい。1823年にアメリカン・ボードによって設立されたバティコッタ・セミナリーは、セミナリー（神学校）と名が付いてはいるものの、実質的には世俗的な教育機関と化して久しかった。1830年代末に財政難から食費を学生の自弁とした時点で、入学者は富裕な家族の子弟で占められるようになる。彼らの入学の主要な目的は、同校にて英語を身につけ、それを武器にしてセイロンあるいはインド政府における職を得ることにあり、しかも彼らの中でキリスト教へと改宗し信仰を後まで維持した者は、比較的わずかであった。²⁰

つまり文明化と宣教という二つの事業は、学校という形で密接にカップリングされて現地人に提供されたわけだが、一方で受け手である現地人の側では、キリスト教信仰とは距離を置きつつ、先進的な知識や技能といった西洋文明の産物のみを選択的あるいは優先的に受容していくといった態度が、しばしば見られたわけである。宣教と文明化を分離し前者に集中するというアンダーソンの戦略は、こうした状況に対する彼なりの処方であったと解釈することができよう。

6. 終わりに

アンダーソンの主唱するところの、宣教と文明化の分離ならびに前者の後者に対する優越という原則は、1856年にアメリカン・ボードの公式方針に組み込まれ、「宣教方針の概要」として、以下のような形で公表された。

宣教は、聖書に基づき自己発展するキリスト教の拡大のために、実施される。これこそが宣教の唯一の目的である。文明化が最終目的として、宣教の際に試みられることは決してない。ただし宣教は他のすべての活動に比して、文明化をもたらす媒体としては最も効果的なものである。なぜなら（1）自己発展するキリスト教の中には、一定の総体的な進歩が含まれており、そうした進歩はキリスト教の自己発展に向けての手段として促進されなければならない、また（2）人間知性や社会生活における急速な変化は、キリスト教の自己発展から出てくる必然的な結果でもあるからである……さらに言えば、諸々の宣教団体が追求する目標自体は単純なものであるが、一方で彼らはそうした目標に達しようとする際に、多くの制約に従属することになる……彼らの能力は有限であり、よって人員と金銭の運用における効率化は必須となる……彼らの用いる組織は必然的に巨大化し、このためその運用においては、単純さが常に好まれることになろう……様々な俗事は弱点となりがちであり、よって可能な場合は一貫して避けられることになろう。²¹

アンダーソンが持論をアメリカン・ボードの公式方針にこのような形で組み込むことによって、宣教が「高邁かつ精神的な職業 (the high spiritual calling)」であり、またその唯一の目的がキリスト教の拡大自体にあるという意識を、宣教師の間に根づかせようと意図していたとは、いちおう言えるであろう²²。一方で、アメリカン・ボードの活動を宣教へと集中し、文明化さらには他の「俗事」を可能な限り削ぎ落とすことは、団体の経済的かつ効率的な運営という観点からも正当化できる方針であった。アンダーソンが恒常的な資金不足に悩むアメリカン・ボードの幹事として、事あるごとにコスト削減を図ろうとした人物でもあったことを考え合わせれば、文明化に対する彼の批判が、経営の観点からの発言でもあったとは、いちおう解釈できよう。²³

ただしこのことをもってして、本稿の冒頭で紹介した中山論文のように、「アンダーソンは、少ない予算でいかに効率よく宣教事業を行なうか、このことに非常に強い関心を抱いたように見える。そして、もっぱら『福音伝道』のみに専念すべしと言う方針を使徒パウロの宣教に基づいているとすることで、正統性を主張しているのだと思われる」²⁴と結論するのは、いささか言い過ぎであると思う。アンダーソンが使徒パウロの活動を宣教における一種のプロトタイプとみなして、しばしばその事績に言及したことは事実であり²⁵、また宣教から文明化を分離することで前者の経済効率化を図るべしというのも、確かにアンダーソンの主張である。ただし一方で、こ

のような効率化は少なくとも原理原則論の次元では、まずもって宣教事業への集中を通じてもたらされるべき結果として、構想されていたのではあるまいか。先に挙げた「宣教方針の概要」の引用部に見られるように、効率化や単純さは宣教に際しての現実的な諸制約に対処するための、一つの方策として挙げられているのであり、経費節約という目的自体が先に存在して、そこから宣教と文明化の分離が帰結されたわけではなからう。

アンダーソンが宣教と文明化の分離そして前者への集中という持論を積極的に適用し、またその成功例であると自認していたのは、ハワイ宣教の場合であった。ただしハワイにおいて宣教が文明化を凌駕したと、彼がはたして心底から捉えていたのかと問うてみれば、以下に引用する彼の発言が暗示しているように、話はそれほど単純ではなさそうに見える。

こうした歴史（訳注：ハワイの宣教史）において最も明らかな事実の一つは、ハワイ諸島では福音が文明化に先んじたということである。少なくとも、文明化の進展は福音よりもはるかに遅かった……ただし、文明化が先んじることにはなかったとはいえ、それは福音に続いてやって来たのであり、しかもそれほど遅れて来たわけでもなかった。現地人の間では、自分たちの家を改良したり暮らしの快適さを増進しようとする欲求が、だんだんと見られるようになった。彼ら現地人は道具の使い方を学んで、帽子やボンネット帽や衣類、さらには生活必需品としての家具を作ることを学んだのである²⁶。

この引用部に関して、先に挙げた中山論文は「1865年にアンダーソンは、『歴史の中で最も明白な事実のひとつは、ハワイ諸島では福音が文明に先行したことである。少なくとも、文明の進歩は福音の進歩より遅かった』と書き、『福音』が『文明』より先だったことを強調している」と述べている²⁷。見てのとおり、上で私がアンダーソンの著作から引用した箇所のうち、中山論文で訳出されているのはその前半だけであり、後半は省略されている。さらに言えば、中山論文の引用はアンダーソンの原典ではなく、ハリスの著作からの孫引きであるが、そのハリス自身は当該部分を以下のような形で紹介している——「『こうした歴史において最も明らかな事実の一つは、ハワイ諸島では福音が文明化に先んじたということである。少なくとも、文明化の進展は福音のそれよりも、はるかに遅かった』。にもかかわらず、アンダーソンは以下のように言い加える。『ただし、文明化が先頭に立つことはなかったとはいえ、それは福音に続いてやって来たのであり、しかもそれほど遅れて来たわけでもなかった』」（傍点は私自身による）²⁸。

アンダーソンの発言に関して、中山論文とハリスの著作をこのように比べてみれば、私は前者がまったく的外れであると断じるつもりはないにせよ、後者の方がアンダーソンの発言の含意を、より適切な配慮をもって取り扱っていると考える。アンダーソンは少なくとも当該引用部において、福音が文明に先行したことを指摘したが、にもかかわらず、彼は自身によるそうした指摘の範囲内に止まっただけではなかった。つまりここでの問題点として着目すべきは、宣教の成功例であ

るハワイについて、「福音が文明化に先んじた」と述べるアンダーソンが、同地における文明化の進展の重要性についても、並行して自身の視野に入れざるをえなかったという事実である。宣教の優位というアンダーソンの戦略が成功裏に進展したはずのハワイにおいて、現地人が西洋の物質文明の産物をその生活へと取り入れていく過程に言及する際に、アンダーソンはそうした文明が単独で（つまりキリスト教と必ずしもカップリングされることなしに）人々を魅了する力についても、多分に認識していたとは言えないだろうか。先に紹介したバティコッタ・セミナーにおいては、キリスト教化が順調に進んだとは言い難い反面で、現地人による西洋先進知識の功利的な受容は、明らかに一定の発展を見せている。同セミナーに関するアンダーソンの見解と考え合わせてみれば、異教徒を独特の力で惹きつける西洋文明こそ、宣教の至上性を擁護する彼にとっての脅威であり、たからこそ彼は宣教と文明化の分離を繰り返し主唱したのではなかったか。この点からさらに踏み込めば、宣教の現場で福音化と文明化のカップリングを続けられれば、前者はいずれ後者によって凌駕されてしまうやもしれぬというのが、アンダーソンの危惧ではなかったか、とも私には思えてくる。小檜山ルイによれば、「アンダーソンの見解は、キリスト教さえ伝えれば文明は自ずからついてくる」という「楽観的な前提に立っていた」とのことである²⁹。小檜山のこの説明は、アンダーソンの文明観についての通説を反映しており、また先に紹介した「宣教方針の概要」とも内容的に符合するものなのだが、彼が文明に対する福音の優位を完全に躊躇なく前提・強調していたとは、すでに述べたように私には信じ難い。いずれにせよ、アンダーソンがそれほど「楽観的」であったかどうかは、さらに詳細な検討を要する問題であろう。

アンダーソンは宣教理論における当時の第一人者であり、かつアメリカン・ボードの海外宣教活動を統括していた人物でもある。彼のこうした立場を考え合わせれば、その同時代的な影響力の大きさは疑う余地のないものであろうが、しかし一方で海外宣教の現場において、宣教と文明化の分離ならびに前者の後者に対する優越というアンダーソンの原則が一貫して実現されたかと問えば、おそらくそうではなかっただろう、と私としては答えざるをえない。例えば宣教医の場合に典型的なように、先進知識や技術といった西洋文明の実利的な果実が、異教徒の目をキリスト教へと向けさせるのに極めて有力な要素であったことは、論を俟たない。また事実として、アンダーソン主義に立脚する「宣教方針の概要」の定めにもかかわらず、宣教師の多くは依然として派遣地において、聖職者のみならず、文明化のエージェントたる学校教師として活動することも多かったし、特に女性宣教師の場合はそうであった³⁰。

さらに言えば、非西洋世界の赴任地で宣教と文明化という二重の役割を負っていた宣教師の中には、赴任地での滞在期間が長くなるにつれて、宣教よりもむしろ文明化のエージェントとして生きるようになった者も相当数存在するのでは、という感触を私は持っている³¹。例えば、アメリカン・ボードによって当初は神学校として構想された京都の同志社は、やがては文明化の一大機構たる大学へと成長あるいは変質していき、同志社に關係する宣教師からも、やがて活動の主

眼を教職へと移していく者が登場していく³²。同志社のこのような歴史に暗示されているのは、アンダーソンの構想が短期的にはともかく、中長期的には文明化という動因によってついには実現を阻まれた、ということではないだろうか。だとすれば、宣教と文明化を分離しようとしたアンダーソンは、後者の前者に対する（彼の立場からみた）負の影響力を正しく感知していた、一種の先覚者であるとも解釈できる。ただしこれらの点については、私としてもまだまだ検討の最中であり断定できない部分も多いので、現時点では一つの示唆にとどめ、今後の課題としたい。

註

- 1 原文は以下のとおり—“Evangelization” and “civilization” had been the key words in American mission methods, —and in Protestant missions on the whole. There was argument about which should have priority, but it was generally held that the two were supplementary and complementary. It was believed that the acceptance of the gospel through “evangelization” always brought to non-European peoples the desire and incentive to attain “Christian,” i.e., European civilization; while if “civilization” were stressed in initial contacts with such people it produced understanding and acceptance of the gospel. Consequently, “civilization” was emphasized especially as fostered through schools. (R. Pierce Beaver, “Introduction: Rufus Anderson, Grand Strategist of American Missions,” in Beaver ed., *To Advance the Gospel: Selections from the Writings of Rufus Anderson* [Grand Rapids: Williams B. Eerdmans Publishing Co., 1967] : 13.) 本稿では以下、英文文献を引用する際には本文中に日本語訳を掲載し、また原文との比較対照の便に供するため、該当する英語部分を註釈にて付すことにする（短い語句については、括弧に入れて本文中に記した所もある）。なお原文でのイタリック体による強調は、これをそのまま記載し、訳文では該当箇所に傍点を付すことで対応した。
- 2 中山和芳「福音伝道と文明化 19世紀アメリカン・ボードの宣教思想」、杉本良男編『キリスト教と文明化の人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告 62, 2006年, internet, http://ir.minpaku.ac.jp/dspace/bitstream/10502/1898/1/SER62_009.pdf）。
- 3 William R. Hutchison, *Errand to the World: American Protestant Thought and Foreign Missions* (1987, reprint, Chicago and London: University of Chicago Press, 1993): 82.
- 4 ここで私が書くアンダーソン略伝は、ビーバーの解説（Beaver, “Introduction,” 10-12）に多くを負っている。
- 5 Beaver, “Introduction,” 11.
- 6 Paul William Harris, *Nothing but Christ: Rufus Anderson and the Ideology of Protestant Foreign Missions* (New York: Oxford University Press, 1999): 17.
- 7 Ibid., 12.
- 8 ...the object of civilizing and christianizing the...tribes of American Indians...is...of too great importance to be overlooked, deeply interesting in itself, and presenting very peculiar claims upon the con-

sciences, the feelings, and the liberalities of American Christians...To establish schools in the different parts of the tribe under the missionary direction and superintendence, for the instruction of the rising generation in common school learning, in the useful arts of life, and in Christianity, so as gradually, with the divine blessing to make the whole tribe English in their language, civilized in their habits, and Christian in their religion; this is the present plan...and having learned to read the English language, the sources of knowledge and means of general improvement then opened to them will be incomparably greater and more various than their own language could ever procure for them. Assimilated in language, they will more readily become assimilated in habits and manners to their white neighbors; intercourse will be easy and the advantages to them incalculable. (Samuel Worcester, *Minutes of the Seventh Annual Meeting* [1816] , in *First Ten Annual Reports of the American Board of Commissioners for Foreign Missions, with Other Documents of the Board* [Boston: Crocker and Brewster, 1834]: 135-136) .

9 Hutchison, 65.

10 ...the facilities enjoyed by us for propagating the gospel throughout the world, are vastly greater than those enjoyed by the apostles...As to facilities, we have the advantage of the apostles in all respects, except the gift of tongues. The world, as a whole, was never so open to the preacher of the gospel since the introduction of the Christian dispensation. The civilization, too, that is connected with modern science, is all connected also with Christianity...I should add, that the civilization which the gospel has conferred upon our own New England is the highest and best, in a religious point of view, the world has yet seen. (Rufus Anderson, *The Theory of Missions to the Heathen. A Sermon at the Ordination of Mr. Edward Webb, as a Missionary to the Heathen* [Boston, Press of Crocker and Brewster, 1845]: 3.)

11 ...this very perfection of our own social religious state becomes a formidable hindrance to establishing such purely spiritual missions among heathen nations...For, the Christian religion is identified, in all our conceptions of it from our earliest years, with the almost universal diffusion...of the blessings of education, industry, civil liberty, family government, social order, the means of a respectable livelihood, and a well ordered community. Hence our idea of piety in converts among the heathen very generally involves the acquisition and possession, to a great extent, of these blessings; and our idea of the propagation of the gospel by means of missions is, to an equal extent, *the creation among heathen tribes and nations of a highly improved state of society, such as we ourselves enjoy*. And for this vast intellectual, moral and social transformation we allow but a short time. We expect the first generation of converts to Christianity...to come into all our fundamental ideas of morals, manners, political economy, social organization, right, justice, equity; although many of these are ideas which our own community has been ages in acquiring. (Ibid., 4.)

12 Ibid., 5.

13 ...the missions have a *two-fold object of pursuit*; the one, that simple and sublime spiritual object of the ambassador for Christ...“persuading men to be reconciled to God;” the other, the reorganizing, by various direct means, of the structure of that social system, of which the converts form a part. Thus the object of the missions becomes more or less complicated, leading to a complicated, burdensome, and perhaps expensive course of measures for its attainment. (Ibid.)

14 Ibid., 6.

15 ...the missionary's *great* business in his personal labors, is with the unconverted. His embassy is to the rebellious, to beseech them, in Christ's stead, to be reconciled to God. His vocation, as a soldier of the cross, is to make conquests, and to go on, in the name of his divine Master, 'conquering and to conquer;' committing the security and permanency of his conquests to another class of men created expressly for the purpose. The idea of *continued conquest* is fundamental in missions to the heathen, and is vital to their spiritual life and efficiency...the missionary prepares new fields for pastors; and when they are thus prepared, and competent pastors are upon the ground, he ought himself to move onward, —the pioneer in effect of a Christian civilization—but...an ambassador for Christ, to preach the gospel where it has not been preached. And, whatever may be said with respect to pastors, it is true of the missionary, that he is to keep himself as free as possible from entanglements with literature, science and commerce, and with questions of church government, politics and social order. (Ibid., 7-8.)

16 The Ahmednuggur...and Ceylon missions were alike in their beginning. They were so in respect to schools. At the outset, schools for heathen children, taught by heathen masters, were a prominent feature in them all...The number of pupils in the Mahratta missions rose at one time to two thousand...in the Ceylon, to six thousand; and there were select schools and boarding schools. But a period of decline always comes to such schools...The heathen schoolmaster is a questionable agent for inculcating gospel truth, and it comes to pass that the money can be better employed than in his support. Our brethren in the Mahratta missions declared that they were unable to point to a single case of conversion among the ten thousand pupils, who had been thus instructed in their missions. Our brethren in Ceylon could recollect only about thirty conversions among the thirty thousand children, who had been in their common schools. Looking at the whole working of the schools, we were led to say in our letter to the Mahratta missions, “Schools, regarded as *converting* instrumentalities, have almost wholly disappointed us; regarded as *preparatory* means, they have not answered expectation; and as auxiliaries, they have been expensive.” (*Report of the Deputation to the India Missions, Made to the American Board of Commissioners for Foreign Missions, at a Special Meeting, held in Albany, N.Y., March 4, 1856* [Boston: Press of T. R. Marvin, 1856]: 27-28.)

- 17 Harris, 39.
- 18 Rufus Anderson, “Missionary Schools” (1838), in Beaver ed., *To Advance the Gospel*, 164–165; アンダーソンの教育観全般については、ビーバーの解説 (Beaver, “Introduction,” 25–27) を参照のこと。
- 19 The Batticotta Seminary was in operation thirty-one years, and its cost in that time was about \$100,000, including the salaries of its missionary teachers. In its later years, the admission of scholars who paid their board, unexpectedly wrought an unfavorable change in the institution, by introducing students from wealthy families, whose main object was to fit themselves for government service. The influence of this class was not good upon the religious character of the school. In the year 1855, only eleven of the ninety-six students were members of the church....The number of students, who had been church members up to that time, was six hundred and seventy, —somewhat more than half the whole number; and of these four hundred and fifty were then living. About ninety had been excommunicated, most of them, it appears, for marrying heathen wives. Eighty of the graduates were then in the employ of the American mission, and thirty were in the employ of other missions; and one hundred and fifty-eight were in the service of the Ceylon and India governments. (Rufus Anderson, *History of the Missions of the American Board of Commissioners for Foreign Missions in India* [Boston: Congregational Publishing Society, 1874]: 327–328.)
- 20 Harris, 70–71; Wilbert R. Shenk, *North American Foreign Missions, 1810–1914: Theology, Theory, and Policy* (Grand Rapids: William B. Eerdmans Publishing Co., 2004) : 77–79.
- 21 Missions are instituted *for the spread of a scriptural, self-propagating Christianity*. This is their only aim. Civilization, as an *end*, they never attempt; still they are the most successful of all civilizing agencies, because (1.) a certain degree of general improvement is involved in a self-propagating Christianity, and must be fostered as a means thereto; and (2.) a rapid change in the intellectual and social life is a sure out-growth therefrom....The object, then, which missionary societies have in view, is simple; but in reaching it, they are subject to many conditions....Their ability is limited; hence *economy* in the employment of men and money becomes imperative....The machinery which they use, is necessarily large; for this reason they will always prefer *simplicity* in their operations....*Secular complications*, as tending to weakness, they will studiously *avoid*, so far as may be practicable. (“Outlines of Missionary Policy” [1856], in *Report of the Special Committee on the Deputation to India* [New York: John A. Gray’s Fire-Proof Printing Office, 1856]: 35–36.)
- 22 Anderson, *The Theory of Missions to the Heathen*, 11.
- 23 支出削減の試みという点をめぐってのアンダーソンの思想に関しては、現在準備中の別の論文（「アメリカン・ボードと自給教会論」〔仮題〕）において、改めて論じる予定である。
- 24 中山, 217頁。

- 25 この点については、ビーバーの解説 (Beaver, "Introduction," 14-16) を参照のこと。
- 26 One of the most obvious facts in this history is, on the Hawaiian Islands *the gospel preceded civilization*. At least, the progress of civilization was much slower than that of the gospel...But though civilization does not take the lead, it follows the gospel, and not far behind. A desire was gradually awakened among the natives to improve their houses, and to add to their social comforts. They learned the use of tools, and to make hats, bonnets, garment, and the more necessary articles of furniture. (*The Hawaiian Islands: Their Progress and Condition under Missionary Labors* [Boston: Gould and Lincoln, 1864]: 384-386.)
- 27 中山, 213頁。
- 28 Harris, 158. ハリスの原文は以下のとおり: "One of the most obvious facts in this history is, that on the Hawaiian Islands *the gospel preceded civilization*. At least, the progress of civilization was much slower than that of the gospel." Nonetheless, he [i.e., Anderson] added, "though civilization does not take the lead, it follows the gospel, and not far behind."
- 29 小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師—来日の背景とその影響』(東京大学出版会, 1992年), 293頁。
- 30 教師としての女性宣教師の活動については, Amanda Porterfield, *Mary Lyon and the Mount Holyoke Missionaries* (New York: Oxford University Press Place, 1997) および小檜山前掲書を参照のこと。
- 31 ここで「感触」と書いているのは, 私がこの点に関して議論を統計的に詰めきっているわけではなく, したがって現時点では確たる実証が提示できないからである。ただし宣教師から文明化のエージェントへと (自覚的あるいは無意識に) 転生していったと思われる人々は, アメリカン・ボードに関する先行研究において散見される。例えば, 塩野和夫が『19世紀アメリカンボードの宣教思想 I 1810~1850』(新教出版社, 2005年) で論じている, 中国派遣の宣教医パーカー (Peter PARKER, 1804-1888) は, これに該当する好例であろう。パーカーは宣教医として広州に派遣されたが, その活動が宣教よりも医療 (そして外交) に偏っていると判断された結果, アメリカン・ボードによって1847年に解雇された。彼はその後も中国に止まり医師として活動を続け, 1855年までの19年の中国滞在の間に, 延べ5万人以上の中国人患者を診察したという。「医療活動は, 彼にとって中国人患者と関わりを持つ場であり, 宣教活動の場でもあった」(塩野, 174頁) というのは, 確かにそのとおりであろうが, 一方でパーカーに対する現地中国人たちのニーズの主眼が, 彼の宣教よりも医療活動にあったことは, 否定できない事実であると思う。先進医療という西洋文明の一つの精華を体現したパーカーであったからこそ, 患者は彼の説く福音に耳を傾けたのではなかったか。だとすれば, 「パーカーは中国人に対する医療活動に成功したために, ボードとの関係を維持するための時間を確保できなかった。宣教医としての献身と成功が, パーカーを解任へと追いやったのである」(塩野, 175頁) とい

う解釈は、私にとって無条件で首肯できるものではない。「宣教医」という概念自体が、（パーカーを解雇したアメリカン・ボード側の認識に暗示されているように）福音化と文明化という二つの対立的な要素へと分裂しうるものであって、パーカーは已に対する現地人の期待に積極的に答えることで、宣教師よりもむしろ医師であろうとする方向へと進んでいったように、私には見える。

- 32 この点に関する様々な示唆を含んだ論考として、ポール・F・ボラー『アメリカンボードと同志社：1875-1900』（北垣宗治訳，新教出版社，2007年）は極めて有用なものである。

Evangelization, Not Civilization: Rufus Anderson's Mission Theory and the ABCFM

Yutaka ITO

In 19th-century Protestant missions, “evangelization” and “civilization” were usually regarded as twin concepts in that they should be complementary to each other. For non-Christian “natives” who were going to be evangelized, the acceptance of the gospel was always coupled with the material welfare of Western civilization. Meanwhile, missionaries considered civilization as a key element in laying the foundations for a thorough understanding of the gospel on the part of the converts; in this respect, the importance of primary schooling was especially stressed in order to foster a “civilizing” effect on “backward” non-European peoples.

As the largest missionary organization in the 19th-century United States, the American Board of Commissioners for Foreign Missions (ABCFM) had been applying the evangelization-civilization principle to its mission activities until the 1830s, when the mission theorist Rufus Anderson came to demonstrate his initiative in administering the Board's overseas operations. He challenged the conventional coupling of evangelization with civilization, and finally managed in the mid-1850s to introduce into the ABCFM's official policy his principle of prioritizing evangelization over civilization.

Anderson thus imprinted his name on the history of American Protestant missions: he was a leading figure in charting the course of the ABCFM's foreign missions during the mid-19th century. The purpose of this paper is to analyze Anderson's theories and strategies, along with their historical significance.

